

君の詩が僕に注ぐ



macoto



ねえ... あの約束 覚えてる？
小さい頃に君と探した4つ葉のクローバー
あたしが探しても どうしても見つからなくて
いつも君が見つげてくれたんだ

きっと あたしが探してたものは
4つ葉のクローバーじゃなくて
君の笑顔だったんだと思うよ

君が4つ葉のクローバーを見つける度に
すごく嬉しそうな顔であたしにくれる
あたしは君のその顔がまた見たくて
あのクローバーの丘で君を待っていたんだ

幸せは君の笑顔が運んでくれてた
あの頃のあたしのままで
あたしはあのクローバーの丘で
君の笑顔を待っているよ

君の瞳には あたしのこと

どんな風に見えてるんだろう

もしもできることなら

君の瞳のなかに入って行って

どんな風に見えてるのか見てみたいよ

きっと恥ずかしいくらい

真っ赤になってるあたしが居て

見てらんないだろうけど

君にはどんな風に見えてるのかな？

恋をすると心の奥のほうから　どンドン気持ちが溢れてくるよ

君を知れば知るほど　聞きたい気持ち　話したい気持ち
会いたい気持ち　触れ合いたい気持ち　繋がりたい気持ち

あたしは必死に　そんな気持ちを抑えようとするけど
この好奇心はぜんぜん止まってくれないの

抑えようとするほど　どンドン想いは溢れてくるから
『……抑えるのをやめてみようかな』
なんてそんな勇気もなくせに鏡に向かって呟いてみた

いつかこの溢れる気持ちが枯れるときがくるのかな
たとえこの気持ちが枯れることがあったとしても

この心に残るものが　それでもあるとしたら
それは恋じゃなくて　きっと愛なのかもしれないね

この溢れる気持ちがなんなのか
時間をかけて君がのんびりと泳げる水槽に溜めているよ

溢れることのない心の水槽のなかで
いつか一緒に泳げる日が訪れますように...と



あのひとがあたしのこと
どう思っているのか知りたくて
花びらを1枚1枚 抜いて占ってみる

『すき きらい すき きらい...』

なんか違う気ががしたから

『すき すき すき だいすき』

花びらを1枚1枚 抜くごとに
あのひとの好きな所を思い出す

花びらを1枚1枚 抜くごとに
あのひとへの想いが溢れ出す

大事なのはあたしがどう思ってるかどうか
あたしはあのひとのことが大好き

1枚1枚 花びらを抜かれてく花も
その方がきっと咲いた甲斐があるよね

ひとりぼっち

ひとりがすきだから
いつもめだたないようにしてた

ひとりがすきだけど
いつもだれかのめをきにしてた

ひとりになりたいけど
いつもきみのぬくもりをさがしてた

ひとりになってしまうと
いつのまにかあたしはないてた

ひとりぼっちのしずかなじかん
ひとりぼっちなきみのところ

ひとりぼっちのとなりにあたし
ひとりぼっちがすきなあたし

君の好きな人が あたしならいいのに
そしたら両想いになれるのに...

君の好きな人が あたしならいいのに
そしたら君がそんなにまで泣くこともないのに

君の好きな人は たぶんあたしじゃないから
きっとあたしじゃないから...

あたしにできることなんて ほんの少し
ほんの少ししかないんだよね

泣いている君のとなりで
そっと涙を拭ってあげるくらい...

君を泣かせることも 君を笑わせることも
あたしじゃない違う誰かなんだよね

君の想う大切な人が
あたしならいいのに...



高く積まれたレンガのように
あたしは心に壁を作った

『この壁を乗り越えてくれるのは
あなただけよ』と思わせたかった

でも だれもこの壁を乗り越えては
来てくれなかった...来れなかった...

いつの間にか高く高く積み上げた
心の壁はあたしも外に出れないくらい
誰の心も寄せつけないものになった

あたしを孤独にしたのはあたし

君は誰にでも優しいから
あたしはあたしで居られなくなる
だからあたしからさよなら言うんだ

わかってるよ
あたしがあたしで居られないのは
君のせいじゃないって
君の優しさがあたしだけの特別じゃないって
わかってるよ

あたしの弱さ

でも それでも ほんのちょっとだけ
もしかして...って思っちゃうんだ
さよならを言ったって
結局 君を気にしちゃってるあたし

誰にでも優しい君を好きになったあたし
君は正反対なあたしをどう思っているの？

その優しさをあたしだけに判るように
言葉にしてくれないかな？

八方美人な君に

君に何かを求めてばかり居ても
あたしの心が満たされてなければ
いつまで経っても満たされないままね

君を求めているあたしが
自分の事を愛してあげてないんだから
いつまで経っても心は満たされないまま

そして失望したその先には
「やっぱり」 「……なんて」 「……でしょ」
予定調和な言葉で自分を慰め
相手を否定して傷付けるだけ

言葉ほど怖い凶器はないのかもしれないね
言葉ほど強い武器もないのかもしれないよね
言葉を当たり前のように軽々しく使ってばかり

でもね そんなときに救われたのも言葉だった

言葉ほど 優しくて 柔らかくて 温かいもの
言葉ほど 心に近いものはないよね

ありがとう そんな言葉をくれた君へ

ずっとなんて約束 あたしの辞書にはなかったの
この世には永遠と呼べるものなんてひとつもないから...

寂しさも 笑顔も 喜びも 悲しみも
ずっと続くことはないんだと思っていたの

君は大きく首を横に振って
少し微笑みながらため息をつく

『永遠 ずっと 永久に 変わらない
そんなもの たしかにないかもね

でも それは解らない 僕らには
それを確かめる時間がないから

でもね 見えない明日こそ永遠なんじゃないかな
目に見えないものにこそ 永遠は宿ると思うよ』

そう言ったときの君の微笑みを
あたしはずっと忘れないでしょう

君を気にしてるのに わざと無関心なフリして
冷静な顔をするあたしは どこまで不器用なの

本当は気付いて欲しかったけど
わざと気付かれないように電話じゃなくて
メールで 『元気だよ(^O^)/』

必死で隠すけど
心の中は君でいっぱい 君のことばかり

こんなに苦しいのに
弱い自分なんて見せたら
君は仕事を放り出してでも
あたしのそばにいてくれる

こんなんじゃダメだって
わかっているんだよ

わかっているからあたしは
君に無関心なフリをするんだ

君が気付かないように



あたしは言葉という飾りをまとめて
幾千もの星のようなあたしの想いを
言葉というたくさんの葉っぱに隠したの

君との関係はこのままで幸せ
でもちょっと切ない
君との距離を縮めたいけど怖い

だからあたしは言葉に隠れて
君への想いを気付くか気付かないかの所に
散りばめて観察しているの

きっと今以上に幸せになるかもしれない
でも今の幸せが壊れるかもしれない
そんな臆病なあたしのカクレミノ

不器用なあたしはこの急な坂道を
全力で駆け上がってくよ

立ち止まったら転げ落ちてしまうから
息が苦しくても足が上がらなくても

きつこの坂道の向こうには
見たことのない景色が広がっていて

たとえその景色が
あたしの望んだものでなくても
全力で駆け上がった坂の上

あなたという光が
射しこんでくれたなら...

体中が心臓になったような
ドキドキをくれるのは
全力坂とあなただけだよ



この道の先にはあなたが待っているの？

それともあたしの歩いてきた道なの？

たった一枚の写真を切り取っただけじゃ分からないよ

曲がりくねったこの道を辿って行くと

なにが待っているのかすら

.....未知

信愛なる君へ

あたしは生まれたての雛のように
目に映った君を信じてしまうよ

君の温かい羽に包まれたときの
安心感っていったら
何者にも代えがたい温もりなんだよ

君に出逢わなかったら
あたしはこの殻から出ようとしなくて
いつまでも心の傷を纏った
臆病な黄身のままだったよ

やっとこの世界に生まれてこれで
生きている実感を持てたのは
君が温めてくれたから

なんとなく生きてたあたしに
光をくれたのは君だから

心に吹く冷たい風に
凍えるようにうずくまってたあたしを
照らしてくれたのは君だから

まだ生まれたばかりの卵だから
あたしの心には白味のような
過去の闇が纏わりついてるけど

君を信じ続けるって決めたんだ
生まれたての雛のようにね

たとえ君があたしを裏切ったとしても
あたしはそれを裏切りとは思わない

たとえ裏切られたとしても
君はあたしの太陽だから
いつも心に栄養を与えてくれるから

永久を誓ってくれた

世界にひとつだけの愛を捧げてくれた

君だけを信じているあたしがいるから

信愛なる君に

誰かに甘えたいと思っても
心を許した人じゃなきゃ
甘えることはできないあたし

いつもわがままなあたしだけ
あたしが甘えられるのは君だけ
君は気分が悪くなって怒るときもあるけど
またいつものように笑ってくれるね

あたしはもう君のことを
家族のように思っているんだよ

甘えられる人がいることは
ほろ苦い人生というコーヒーに
君という甘いシュガーを入れるようなもの

もう君なしではコーヒーは飲めないよ

ふたりだけの時間

ふたりだけの秘密を

ふたりだけの空間で

感じられる時間が

なによりも愛しく思う

いつまでも続けばいいのに...

ふたりだけの内緒話

君だけに見せる顔があるよ

ごめんね 君に話さなかったのは

君を傷つけないからじゃなかったんだよ

でも君に嘘をついたことになるのかなあ

誰かを傷つけるのが『嘘』と呼ぶのなら

誰も傷つけないのは『内緒』と呼ぶんだね

君に嘘はつかないよ

君を傷つけないんだから あたしは

誰よりも君のことを想ってることは『内緒』だよ

もし君があたしに対して不安を抱えているんなら
あたしは心ごと君にあげてもいいよ

もし君があたしとの未来に対して不安を抱えているんなら
あたしはぎゅっと手を掴んで連れてってあげる

もし君が君自身に不安を抱えているんなら
あたしのほんの少しの勇気を分けてあげるよ

不安や悩みは誰にだってあるし
あたしにだってあるよ
ねえ 一人で抱え込まないで話してよ

なんにもしてあげられないかもしれないけど
あたしも君の不安の隣りに居るから...

話しを聞くくらいしかできなくて ごめんね
でもね

きっと心の真ん中にある花は咲くはずだから
そのときはあたしも隣りで一緒に見たいんだ

君と喜びの花を咲かせたいんだ
あたしは君の笑顔の花を見たいんだよ



「なんでそんなにがんばってるの？」

「なんでって僕は誰にも負けたくないんだ」

「そんな風に君は自分にも厳しくてあたしは...」

「やめてくれ！君の意見なんか聞きたくないんだ」

そんな風にして守りたいものはなんですか？

あたしは君の止まり木のような存在になりたいけれど
君はいつでも飛び続けている...

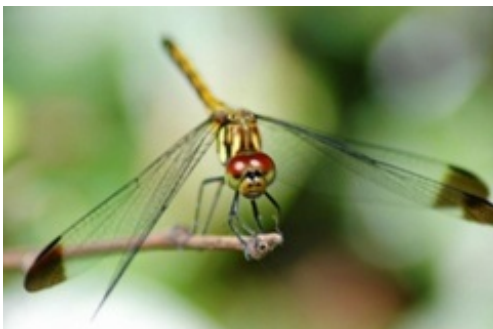
その羽を休めることもしない君に願うこと
君にだけは弱音を吐いてもいいんだって思われたいよ

羽を動かし続けなくても地面に叩きつけられないって
ここに止まってくれることを願うよ

あたしは 君に負けても 誰に負けても あたしだから
あたしは あたしに負けたっていいから
君の止まり木になりたいって思っているよ

だから恐がらないで羽を休めてもいいんだよ

あたしは負けても折れたりしないからね

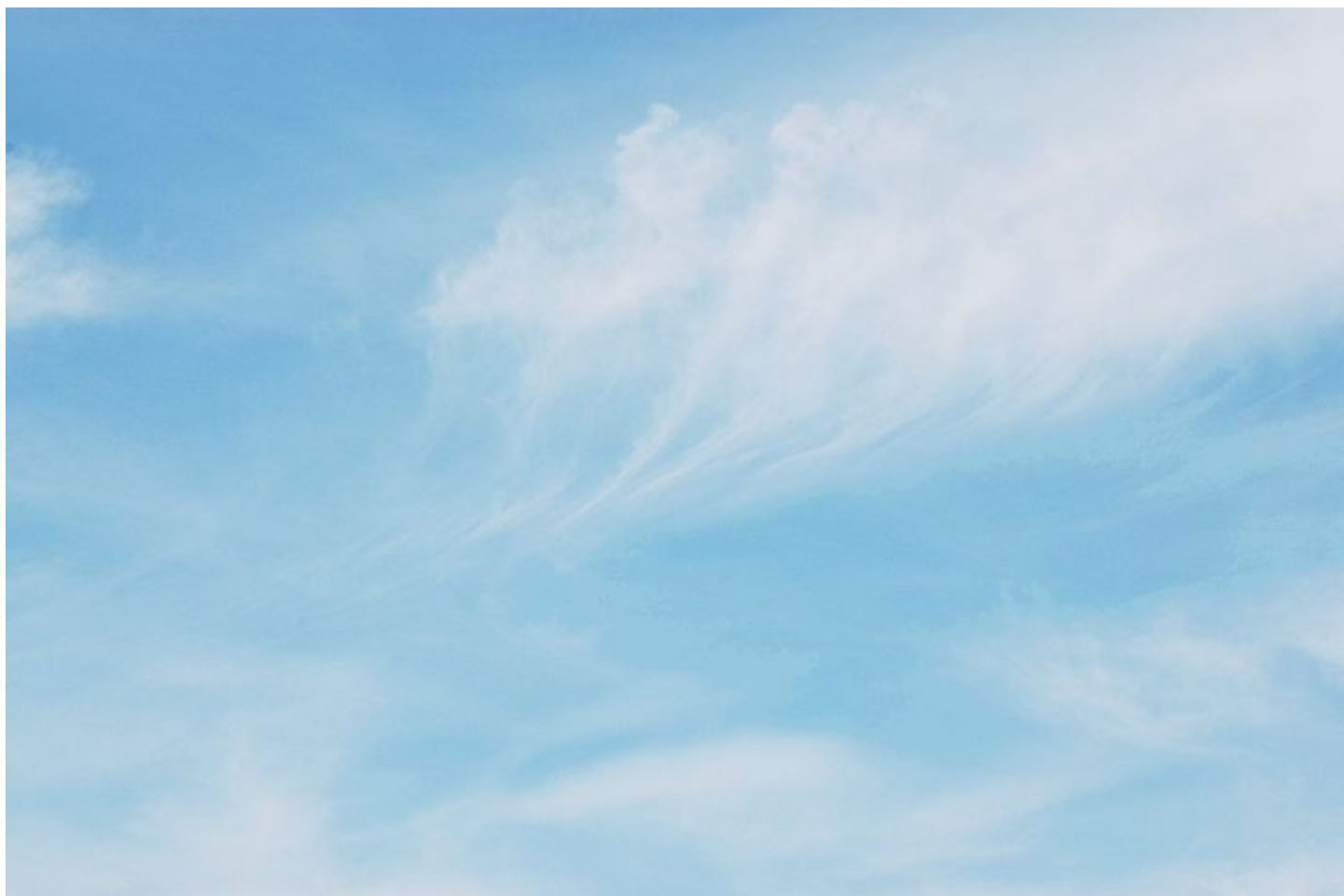


どうしたの そんなふくれっ面して
なに そんなに怒ってるの
君がそんな顔してたら あたしも気分悪いよ

ね 笑ってよ

笑顔は周りの人たちも 幸せな気持ちにさせるよ
だから 笑ってよ
あたしを幸せにしてくれるんでしょ
君が笑うだけで 世界は明るくなるんだよ
ほら あたしの真似してみてよ

ね ほんとでしょ



あたしの瞳に見えているもの
それがホンモノなのかニセモノなのか
どうやったら見極められるの？

キミの瞳に映っている世界は大きくて
まるで凸面の鏡のように何倍の広さにも思える
あたしはそれを君の世界だと思っていた

あたしのこの瞳に映っているキミの瞳のなかの世界は
鏡越しの世界と同じで左右が逆に映るから
あたしは想っていることと逆の言葉を発していたのね

君のことを傷付けたい訳じゃないのに
あたしは鏡越しのキミのことばかり見てたんだ
ホンモノの君はそこには居ないのに...

目の前に広がる鏡越しの世界を壊して
鏡の向こうに居るホンモノの君に逢いにゆこう
あたしの想いのままに気持ちを伝えに行くんだ

たとえ君の世界が鏡越しのキミの世界より
小さくて狭いものだったとしても
あたしはニセモノの輝きよりホンモノを抱きしめたいよ

傷付けてしまった...

君の心を傷付けて

あたしの心も傷付いた

知らなかったんだ

叩かれた方より叩いた方が痛いって

でもね

だからって

君の心を傷付けてしまったことには

変わりはないんだ

あたしのしたことを消してしまいたいけど

心ってのはあたし達が思ってるよりも

広くて大きいものだから

ほんのちょっとしたことだって

一度入ったら消せやしないんだ

だから心の奥の方で泣いている君を

あたしは見つけ出してあげるんだ

泣いてる君を見つけて

抱きしめて 頭を撫でてあげるんだ

心は広くて大きいものだから

決して消すことはできないけれど

そこにあるものを優しく包んで

抱きしめることはできる気がするんだ

そして次に傷付いたって

君が泣かないで済むように

あたしの心の傷も君と分け合うんだ

だって人は傷を知ることで

より強く より優しくなれるものだから

君の名を呼べばいつも返ってくるのが
当たり前だと思ってたあの頃

『おはよう』 と言えば 『おはよう』
『ただいま』 と言えば 『おかえり』

いつだって返してくれてたね

そんな君の優しさに
あたしは甘えてたのかもしれない

いつだってあたしは呼ぶばかりで
君の呼びかけに答えられなくて
寂しい思いをさせてたんだね

『好き』 と言われても 『・・・』
『おやすみ』 と言われても 『・・・』

返事されないのが寂しいって
やっと解ったんだ
君がいなくなってから やっと...

手紙を読んで気付いた君の想い
いまも耳に残る君の声
もしいつかまた君に呼ばれたら
あたしはちゃんと返事したいよ

『ひさしぶり』 と微笑む君に
照れながら

『ごめんね』 と 『ありがとう』

ねえ

あたしはココにいるよ

だれのためでもなく

あたしはあたし自身のため

あたしの居場所を作るため

ココにいるよ

でもね

あたしはあたし自身のためだけに

ココにいる訳じゃないんだよ

あたしは君がいつ来ても

笑顔で迎えられるように

ココにいるよ

だから

あたしはあたしたちのために

あたしはあたしたちの楽園を

あたしは君におかえりと言って

一緒に過ごせるようにと

ココにいること

それがあたしのいる理由

いつか離れる日が来ても...

いつか離れる日が来ても
あたしは未来への希望を込めて
約束をしたいの

現実是不安だらけで
いつあなたが離れていってしまうか
ビクビクしてしまうけど...

こうして一緒に居られているいまを
少しでも幸せに感じて居たいから
あなたとたくさんの約束をするよ

この約束は守らなくてもいいから
いまだけは優しく微笑んで頷いて

『ずっと一緒に居てね...』

泣いてもいいですか

涙もろい君は いつもあたしより先に泣くけれど
今日は泣かないのは何故ですか

あたしが怪我をして 救急車で病院に運ばれたときも
有楽町の映画館で『恋空』を観に行ったときも
初めてふたりがひとつになったときも
見知らぬ子犬が車に轢かれて ふたりに埋めたときも

いつだって君は あたしよりも先に泣くけれど
それをあたしは愛おしいと思いました

それなのに今日の君はいつもと違って
少し無理をしてるみたいな気がします

どこか気持ちがソワソワしてるみたいで
大好きな映画『レオン』を観ていても
いつもなら必ず泣くシーンも上の空

突然 君は私の目を見て
ポケットから小さな箱を取り出すと

『僕と結婚してくれませんか？』

感動屋の君がいつもは先に泣くから
あたしは泣けなくなっちゃうけど
今日だけはあたしが先に泣いてもいいですか

君の詩が僕に注ぐ

<http://p.booklog.jp/book/32068>

著者 : macoto

著者ブログ『もの想い』 : <http://ameblo.jp/maco-monoomoi/>

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/macoto-monoomoi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32068>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32068>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.